

「お盆に因み 思うこと」

清水健二

お盆を前に、亡き「人を悼む」をテーマに思うところを書いてみようと思ったものの、この歳まで生き長らえて来ると数え切れないほどの多くの人との別れがあった。中でも私の人生に大きな存在だった方々を、悼むという言葉で表せない恩人との出会いが多くて筆が進まず、テーマから外れるがお盆になると何故か亡き人を想い、供養する気持ちに至るのか、そしてそれが生活習慣にまでなっているのか、思いつくまま書いてみた。

文化庁の統計によれば、日本の仏教系の信者は70%、神道系の信者は67%、キリスト系信者は1%、その他7%で合計145%となり、人口12600万人に対し18300万人に膨らんでいる。つまり寺の檀家であり、地域の神社の氏子でもある家が多くあって、家には仏壇があり、神棚があるので夫々に信者だとして統計をとっているためだそうである。ちなみに全国にお寺は77000箇所、神社は81000箇所存在し登録されている。

一方、日本人の宗教に関する意識調査の結果では、無宗教49.4%、仏教34.0%、神道2.7%キリスト教1.0%その他12.9%と、日本人の半数が信仰している宗教は「ない」というが、神や仏に関心が薄いのかと思いきやそうでもない。日常生活の中に神仏行事が溶け込み、無意識に共生して暮しているにすぎないだけだと私は思っている。

もともと日本は地形や四季の気候状況から自然崇拝をもとに原始宗教が生まれ、八百万の神を崇める神道があった。6世紀に仏教の伝来と共に大陸文化が取り入れられ国家が形成され、その精神的バックボーンとして神道と仏教が習合して発展した。政治が宗教を利用することの多い世界歴史の中で、比較的習合の宗教は、日本人の生活に穏やかに取り入れられ馴染んで行ったように思われる。しかし明治時代に富国強兵をかけた、廃仏毀釈政策を執り神道をバックボーンにしようとしたが長く続かなかった。これは国民が同調しなかったからだと思っている。また政治家の野望で、天皇を現人神に仕立てて一神教のごとく精神教育したものの、大戦は惨憺たる結果で国を滅ぼすことになった。

神仏習合から1500年を経た現在も、我々の生活の中に色濃く残り伝えられてきている宗教は、大晦日に寺で除夜の鐘をつき、元旦には神社に初詣するのに何の違和感もないほどに神仏が溶け込んでいるのである。

四季それぞれに各地で行われる行事や祭りなど、神事と仏事が重なり合って執り行われている。私の家は浄土真宗であるが、母は私のもの心のつく頃から、庭に出て朝な夕なに太陽に向かってお祈りしているを鮮明に覚えている。母は実家が百姓出だったので、自然の恵みに感謝することを教えられて育ったのだと思う。父は職人で宮大工でありながら、特に宗教に関心を持っている様子はなかった。

多くの日本人は自分は無信仰で、無宗教と言いながら折々の行事に参加し、時には社寺仏閣にお参りして賽銭を投じ、寄付したりしながら祈願することに何の抵抗もなく普通に行っているのである。

お盆がくると亡き人を偲び、初盆を迎える死者にはその霊を鎮魂し、すでにあの世に居る霊にはお迎えする準備をして、共に平和な時間を過ごし、無事あの世に戻ってもらうよう送り火を焚いたり、灯籠を流して見送っている。つまり靈魂は彼岸も此岸も繋がっている感覚で、盆踊りも亡き人と楽しむことから始まったようである。作法の仕方は地域によって様々だが、仏教の救済思想と神道の御霊崇拜思想が重なりあった行事を繰り返してきているのである。従って無宗教ですと言う人の気持を私には理解し難い思いでいる。

私なりに人間の業や煩惱、死生観などについて考える時期があって、仏教哲学にヒントを求めようと書籍を漁ったことがあった。ところが高僧たらんとする人は煩惱を逸脱し、悟りを開くには厳しい修行に耐え、断食したり、千日回峰行などの荒行を経ても、なお悟りの境地に達し難いということを知り、とても凡人の私にはほど遠いことだと悟った。

趣味で仏像彫刻を始めてから、仏教に関係する学者や僧侶、美術家などから話を聞く機会があり、難解な理論や過激な身体的な修行など関係なく、仏像を相手に現世利益を願い、救いを求めて訪れて来る人々の素直な行為に触れたことで、並の人間として私は何となく心休まったものである。つまり親鸞の語る、「歎異抄」の世界を教えられた。

仏像彫刻を始めて40年になる。仏教は多神教として偶像崇拜を是とし、神道も八百万の神として存在しているから、どんな神様が祀られていようが、本尊や経典が違ってもお祈りする人にとっ

では、違いは何であれそれほど違和感はない。時代と共に仏像の形式や様式が変化していても、祈りの対象として仏像を拝している人々は、仏像の持つ役割を知らなくても、自然体で受け入れしている。私のように仏像彫刻する者は夫々に容姿の異なる仏像を、美の対象として捉えているので見方は違うが、祈りの対象として仏像に対峙する時は、素直に拝顔し祈願することには人様と何ら変わりはない。

私の住む八尾市の西隣に大阪市平野区があり、中心街は八尾街道から河内街道へ移る手前にある古い町で、太平洋戦争で被害を受けなかったため、今も昔の佇まいを残している。町のあちこちに地藏尊を祀るお堂があり、道標に石の地藏像が立っている。そして町の人々が供花し香を焚き、灯明をあげ日常茶飯事として大切に保存している。

この町に融通念仏宗総本山の古刹、大念仏寺がある。

毎年5月には「万部おねり」と称する菩薩供養の儀式が大大的に繰り広げられ、極楽浄土をこの世に再現し、きらびやかな二十五菩薩のお面と衣装で、練り歩く行事である。大寺院は老若男女の大変な人出となり、お参りすることで願い事やご利益を戴けると思い集るのである。



大念仏寺「万部お練り」

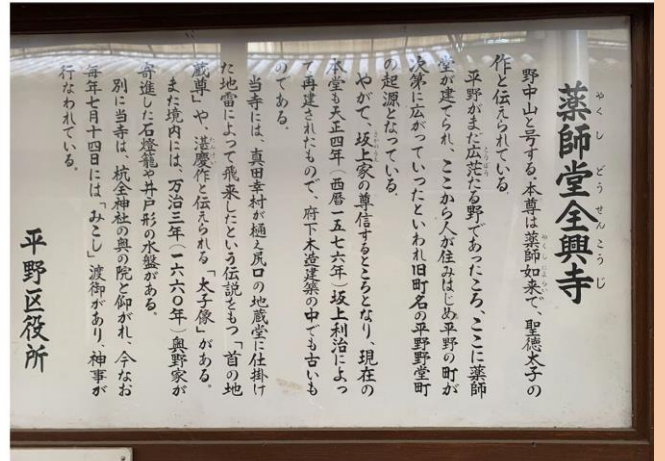


大念仏寺「飴細工の屋台」

また町の中に全興寺という寺もあり、地獄堂や曼荼羅洞など古くから庶民に親しまれた珍しい建物が残されている。四季の花も咲き私は気晴らしに訪ねることがある。



全興寺入り口



全興寺由来説明

子供の頃、縁日や祭りで「のぞきからくり」という屋台があった。前面に覗き窓が多数あって、窓に取り付けられたレンズ効果で中にある紙芝居風の絵が立体画に見えて興味深々だった。おっちゃんとおばちゃんが弁士になって、割竹をバシヤ、バシヤ叩きながら物語を聞かせてくれるのである。物語は地獄極楽の演目が多かったようで悪いことをしたら地獄に落ちる、嘘をつくともん魔さんに舌を抜かれるなど子供心に善悪を教えられた。それと同じ舞台を設え、等身大の人形を配置して、音と照明を交えてまるでお化け屋敷の仕掛けがした地獄堂がある。町の子どもたちも自由に出入りでき、大人も童心に還る楽しみが味わえる所である。



全興寺地獄堂



全興寺曼荼羅洞

また境内に地下洞があり、階段を下ると薄暗い空間に壁いっぱい石像仏が並び、床にステンドグラスで描かれた曼荼羅絵図が鮮やかに浮かび上がっている。まさに異次元の世界に紛れ込んだような感じがする。そしてこの曼荼羅絵図の中心で座禅を組むことを勧めている案内板もある。

現在の子ども達が神社やお寺の境内で、遊ぶ姿は殆ど見られなくなった。暑い夏日に本堂の陰で涼しい風を受けて、話を楽しんでいるお年寄の姿もなくなってしまった。子供達が遊びの中で学ぶ大人達からのしつけや教育も、地域で開催されるや伝統行事も薄れてきてしまった。昔は良かったとは私は思わないが、人々との交流を促す町づくりを次代を担う若者達が進めて欲しいものだと願っている。

話を元にもどして、日本の神仏習合の宗教は、特に意識もせず挨拶する時には頭をさげ、お願いしたい時には手を合わせる謙虚な習慣を生み出した。辛いことや困った時に気兼ねなく、社寺を訪ねて祈願して癒やされる。そんな素晴らしい宗教が身近にあることを誇りに思っている一人である。

お盆を迎えるためには、難しい宗教観にこだわらず、日常生活の中で、亡き人を悼み、偲びながら靈魂が迷うこと無く、帰ってくれるよう明かりを灯して待つことにしている。

私もやがて近いうちに彼岸に旅立つことになるが、輪廻の世界観を有する教えと共に、靈魂は山に住み着くという。気軽に山から会いに帰れるようにしておいてほしいと願っている。

人は一人で生きていけないし、誰かを支え、支えられて生きている。人と人との関わりがあって、喜びも悲しみもあるのだから。

令和3年8月記